ミュンヘンの文学散歩 (8)

佐　野　晴　夫

56. トーマス・マンの旧居のひとつ（Ainmillerstr. 3／III）

居住した明確な年月は確認しがたいが、トーマス・マンが習作『飢えた人々』（1903年１月）を執筆したり、短編小説集『トリスタン』（1903年春）をベルリンのS.フィッシャー書店から出版した時期のコンラート街11番（Konradstr. 11）より、アインミラー街３番３階へ引っ越した１室で、今度は短編小説『神童』（1903年12月）習作『ある幸福』（1904年１月)が書かれたと思われる。ここから更に独身時代最後の下宿フランツ・ヨーゼフ街４番へ転居して行く。

57. リルケのミュンヘン最後の寓居（Ainmillerstr. 34）

アインミラー街34番の建物に14歳年長のルー・アンドレアス・ザロメ（1861－1937）と一緒に暮らした。リルケは1896年に彼女と知り合い、愛し、そして落ち着いて公正な生活を送ることを願った。そして彼は彼女とロシアの素晴らしい古き時代について語り合ったり、ヴォルフラーツハウゼンでおくる田園の休暇生活に熱中した。後に彼女は、彼について「私が数年貴方の妻であったとすれば、貴方が私にとっては最初の現実的なものであったがために、肉体と魂は切り放し難く一つのもので、人生そのものの疑いもない事実」と、語っている[51]。

第１次世界大戦の休戦協定が成立したとき、ライナー・マリア・リルケ（1875－1926）はこの寓居で、感激のあまり、「いまや未来がはじまりうるのだ」と叫んだ。この街に住む間、ミュンヘンのレーテ革命を「最も深刻な伝統乱用の克服」として歓迎したけれども、1918年12月19日に、「大革命の口実のもとに、古い無信念が更に働き続ける」という手紙とともに、アインミラー街をリルケは去った[52]。

クルト・アイスナー（1867－1919）やエルンスト・トラー（1893－1919）たちと結び付いていただけに、「白組」によるレーテ共和制の敗北後、リルケの置かれた立場は悪化した。トラー宅でリルケの書き付けが見つかり、単に文学的な問題が論じられていたにすぎなかったけれども、トラーがアインミラー街

のリルケ宅にかくまわれていると疑われ、警官や兵隊が彼の住宅へ無理矢理侵入して乱暴狼藉を繰り返し、その戦場跡の様な荒廃は、彼の魂に多大の傷を与えずにはおかなかった。幸いにも、彼には、それ以外何も起こらずに済んだけれども、毎日、警察へ出頭せざるをえなかった。彼は、すっかりミュンヘンの雰囲気に嫌気がさした。1916年6月アインミラー街を去った。致命的な侮辱を受けた詩人は、もはや2度とドイツへ戻らなかった。スイスへ向かう列車には、一人の若くて美しい女性が同伴していた。

58. カンディンスキーの別の旧宅（Ainmillerstr. 36）

前回述べた如く、カンディンスキーはゲオレゲ街16aの建物で絵画を学び、レオポルト街と平行するフリードリッヒ街1番の角の家で1902年から1904まで生活したことがある。大学食堂の背後にあたるこの場所は現在レストランへ変わっている。彼とガブリエレ・ミュンターとのロマンスについて言及しておこう。

1901年夏、ロシア人ワシリ・カンディンスキー（1866－1944)が入居してきた。そして彼は芸術家協会『密集方陣』(Phalanx）を設立し、自らがその会長に就任した。1902年初め、併設の美術学校で、丁度アメリカから帰国したばかりの可愛らしいガブリエレ・ミュンター（1877－1962）と出会った。彼女は夜間部へ通った。カンディンスキーはひとめぼれしたが、娘のほうは冷淡だったので、彼女の美しさを同時代人は「降ったばかりの雪」にたとえた。

カンディンスキーはいとこのアーニヤ・チミアキンとの婚姻が続いているのにもかかわらず、1903年に婚約指輪を購入し、夏、新しい恋人と共にレーゲンスブルク近郊のカルミュンツへ行き、婚約を祝った。そして彼は彼女を友人達には妻として紹介した。本妻のアーニアは、夫の離婚意図に深く傷ついた。

ガブリエレ・ミュンターは、ダンス好きで、乗馬やソリーにのるのが得意なだけに、フリードリッヒ街での閉塞生活に飽き足りなかった。他方、深い芸術理解から彼女に支えられたカンディンスキーにとり、フリードリッヒ街での数年は、芸術的に有意義であった。

1904年9月下旬、カンディンスキーとミュンターとはこの街を去った。芸術と恋愛の長い旅へ出かける前に、ミュンターは暫く下宿屋へ移った。

フリードリッヒ街はゲオルゲ街に始まり、カイザー街とぶつかったところで終わるが、その間、コンラート街、ホーエンシュタウフェン街が交わり、ハプスブルガー広場を擁しながら、フランツ・ヨーゼフ街とアインミラー街を縦断

し、さらにホーエンツォレルン街と交差する。そのアインミラー街36番に2人がミュンヘンに戻ってきたとき、アインミラー街36番の住まいへ入居した。ここは、詩人リルケの住んだ隣家である。しかし、新しい美術の求道者たちはこの住居を最後にして、やがて共同生活を終え、チューリッヒ駅頭で別れた。ガブリエーレ・ミュンターはムルナウへ移り住み、そこでヨハンネス・アイヒナーと一緒に生活し、ワシリ・カンディンスキーはロシア将軍の娘ニーナ・アンドレイエフスキーと結婚することになった。この事実をミュンターが知ると、驚き、のちほぼ十年間、良い絵画が出来なかったという。アインミラー街は、そう言う悲しいエピソードを秘めた芸術家街のひとつである。

アインミラー街からフランツ・ヨーゼフ街へ通じる街路のひとつがレーマー街である。この街の16番の建物が、かってシュワービングで精神的労作にいそしむ人々の間で、とりわけ審美主義者や禁欲主義者のメッカになったことがある。

59. ヴォルフスケールとゲオルゲとの思い出の「球体部屋」(Römerstr. 16.)

この建物には、シュテファン・ゲオルゲ(1868−1933)の友人のカルル・ヴォルフスケールが住んでいた。本来、神秘的、神話的抒情詩をかく詩人であるとともに、エッセイストで翻訳家であったヴォルフスケールは、1893年から1933年にかけてミュンヘンで生活し、他方、ゲオルゲは特にミュンヘン大学で学び、1900年から1933年にかけて頻繁にこの南都に滞在し、しかも1903年には15歳の「マクシミン」・クロンベルガーとの特異な出会いをとげている。ヴォルフスケールはA.シューラーやL.クラーゲスとともに1900年頃、「灼熱の生命」を擁護する「コスミカー」のサークルをつくった。これはシュテファン・ゲオルゲを中心とするもので、ゲオルゲはヴォルフスケール宅の、ことのほか、最上階の「球体部屋」に居住するのが好きだった。

屋根裏部屋であるその部屋の中央には乳白色のガラスの球体がぶら下がっており、その質素なランプから部屋全体が照明を受けていたと言う。当時は全く異質な照明形態であったことから、この名称が由来し、偉大な画家のアトリエと同じ様に有名になると、レーマー街16番に出入りを許された者は、まるで貴族へ列せられたかの様に感じた。

この「球体部屋」はミュンヘンではすこぶる有名で、若い才能の持ち主はここでの騎士叙任式をうけることを望んだ。訪問者は、外から履いてきた靴をスリッパに履き換えて、狭くて、天井の低い「球体部屋」のわら蓆を汚さない様

に心がけなければならなかった。ゲオルゲの周辺は神秘的というよりは、質素どころか殺風景で、細長くて、背もたれの付かないベンチが置かれており、友人達が食事に来たときには、質素な真四角のテーブルをそのベンチの前へ移し、更にそこへ別のベンチを置くと言った風であった。

ところで、カルル・ヴォルフスケール（1869－1948）自身は、今日でこそ、殆ど顧みられることが少なくなったけれども、往時は「シュワービングのゼウス」として君臨した人物であった。シュテファン・ゲオルゲのサークルに属し、『芸術草紙』（1892－1919）や3巻本の選集『ドイツ文学』（1900／1902）の編纂に協力した。アポロ風に厳格なゲオルゲから最後には離反して行ったシューラーやクラーゲスとは違い、彼はあくまでも象徴詩の巨匠に忠実だった。彼の詩は、ゲオルゲの抒情詩の形式芸術に対して、過度に感動した頌歌的なものへ化した。彼は情熱的にドイツ文学の伝統を育みながらも、著名なシオニストとして古きユダヤ教の伝統を重んじた。

彼は、ミュンヘンまた憧れの都市でもあったフィレンツェで暮らしたが、1933年にスイスへ逃れ、さらにイタリアからニュージーランドへ渡航し、望郷の念に駆られながら客死した。

60. トーマス・マンの独身時代最後の下宿（Franz-Joseph Str. 4.）

シュワービングの主要道路レオポルド街に近いフランツ・ヨーゼフ街へ移った時期は、ミュンヘン大学数学教授プリングスハイムの令嬢カーチャに求婚して以降の出来事と推測される。プリングスハイム家の人々はミュンヘンでは名士であり、いつも5人兄妹連れだち出歩く姿は人目を引き易かった。音楽会や電車の中で4人の兄達に取り囲まれた可愛らしい令嬢に好意をもち、求愛する者が多かった。トーマス・マンもそのひとりであった。プリングスハイム家の人々と共通する友人や知人を持っていたので、そのうち、トーマス・マンは法律顧問官ベルンシュタインの妻であるとともに、自らエルンスト・ロスマーの筆名で活躍する女流作家エルザ・ベルンシュタインに依頼し、夫人の主宰する知的なサロンでカーチャ・プリングスハイム嬢の隣席に座れる様にとり計ってもらった。以後、次第に親しくなり、アルチス街にある彼女の自宅を訪問するまでになった。勿論、彼女も彼の意図に気付いていたが、好意を抱いた。ワグネリアンである父親は、音楽の趣味ではマンと意気投合したけれども、数学に侮辱的な意見を持つショーペンハウエルに対しては批判的であった。4人の兄達は、当初、詩人が痩せて、少し青白く、きちんと手入れした口髭を整え、態

度も几帳面なことからニックネイムで「肝臓病みの騎兵大尉[53]」と呼んでいたが、彼らも妹とマンとの結婚には賛成で、特に彼女と双子で生まれ、のちに日本で上野の音楽学校学校教授となったクラウスは、一生の間、ふたりの結びの神は自分だと自慢した程であった。トーマス・マンは結婚を切望して止まなかった。父親の病気治療とカーチャの避暑を兼ねてバルト海へ旅行した数カ月の別離の期間、頻繁に情熱的な手紙が彼から届いた。帰った直後、9月、婚約が成立した。カーチャは芳紀20歳、トーマスは29歳のことである。

そしてフランツ・ヨーゼフ街4番のこの住宅で執筆された『予言者の家にて』(1904年6月刊)こそ、カーチャの母親ヘートヴィヒに娘の結婚を許す契機を与えた短編作品であった。そして行きつけの書店主から、「トーマス・マンですか？ああ、あの人。あの人は、少なくともゴットフリート・ケラー程にはなります。そのことは断言出来ますよ」という保証が、娘を嫁がす母親の決断に効果があったと言う。

61. トーマス・マンの新婚生活をおくった住宅（Franz-Joseph Str. 2／III.）

唯一の戯曲である『フィオレンツァ』(1905年1月)の擱筆後まもなく、2月11日、ミュンヘンで結婚式を挙行した。ふたりの新居のことをカーチャ・マンは次の様に記している。「私達は最初の住まいをシュワービングンのフランツ・ヨーゼフ街2番に持ちました。私達がチューリッヒとルーツェルンへ新婚旅行へ行っている間、私の父がこの住まいを私達のためにすっかり素敵に整えてくれていました。それは2月のことで、私達はたっぷり2週間は留守しておりました。それから私達を新居が待ち受けてくれました。私の父はイタリア・ルネサンスにすっかり凝り、またインテリアも大好きでした。けど、間もなくこの住まいは狭すぎる様になりました。エーリカ、クラウス、ゴーロ、そしてモーニカが生まれ来て、4人の子供がいては、そんな所、余裕など有りませんでした。[54]」

5年8カ月後、イザール河畔の閑静な住宅地マウアーキルヒャー街13番の広い2家族用の住宅を借りるまで、マン一家はシュワービングンの繁華なこの中心地で生活した。そしてここで短編小説『生みの悩み』(1905年5月)『ヴェルズンゲンの血』(1906年1月)『鉄道事故』(1909年3月)をはじめ、長編小説『大公殿下』(1909年2月)、評論『ビルゼと私』(1906 年2月)『演劇試論』(1908 年2月)等を執筆した。

62. 反ナチ運動『白薔薇』の兄妹の住まい（Franz-Joseph Str. 13）

既にミュンヘン大学前の「ショール兄妹広場」の名称の由来について言及したハンスとゾフィーの住んでいた最後の建物のあった場所である。24歳の兄ハンスと21歳の妹ゾフィーはドイツ抵抗運動の最も大胆な代表者であり、ミュンヘン大学構内で散布した最後のビラの中で、「自由と名誉！十年もヒトラーとその仲間は、この二つの素晴らしいドイツ語を摩耗し、使いふるし、歪めてしまった。丁度、一国の最高の価値を豚の前に投げ出せるのが、素人だけであるかの様に。[55]」と綴った。逮捕が死を意味することを兄妹は知っていた。およそ30万人の人命を要求したスターリーングラードの危機が迫っているとき、躊躇やためらいの余地はなく、抵抗行為に走った。

ここは、抵抗運動者の落ち合い場所でもあり、ヴィリ・グラーフ（1918－1943）とアレクサンダー・シュモーレル（1917－1943）が宿泊した翌朝、兄が言った如く、ルートヴィッヒ街で70個所以上も「ヒトラーを倒せ！」というスローガンを目撃した。大学の入り口で書かれた自由という文字は、強制労働を目的に連れて来られたロシア女性がブラシに砂をつけて消そうとしていた。

表通りでなく、裏側の建物にあった部屋で新しいパンフレットが計画された。1943年２月18日、妹インゲが著書『白薔薇』で述べた様に、上機嫌でパンフレットを沢山カバンへ収めて、大学へ急いだ。その直後、警告しようと友人が駆けつけた。だが、友人はショール兄妹に会えなかった。そのため、この日が２人の運命の日となった。

兄妹は、「ドイツの若者がつづいて立ち上がり、仕返しを計り、同時にまた償わなければ、ドイツの名前は永劫に汚されたままになる」と言った趣旨のパンフレットを大学キャンパス内に置き、軽率にも、余りの紙を最上階から中庭へ撒いた。不運にも、下級官吏のひとりがゲシュタポへ通報した。ナチスへの仕返しは成功せず、ショール兄妹は、1943年２月22日に「自由万歳」を叫んだあと、クリストフ・プロープスト（1919－1943）たちと一緒に断首処刑された。

63.『ジンプリチシムス』の挿し絵作家たちの宿（Franz-Joseph-Str. 18.）

ミュンヘンと切り離し難い関係にあった美術家のうち、二十世紀初頭、『ジンプリチシムス』のスケッチ画家エドゥァルド・テニー(1866-1950) フェルヂナンド・フォン・レツニツェック（1868－1909）ルドルフ・ヴィルケ（1873－1908）はフランツ・ヨーゼフ街18番で奔放な芸術家生活を送った。３階にレツニツェックだけ、４階にテニーとヴィルケが住んでいた、とルイギ・フォン・

ブアーケル(1877-1946) が思い出の中で語っている。戯画への愛着と並んで共通するのは、蛾の習性と同様に、早朝になって眠り、昼間遅く目覚めたこと。

3人全員が風刺雑誌『ジンプリチシムス』の仕事をしていたので、彼らは殆ど毎日ルートヴィッヒ・トーマ (1867－1921) と一緒に出社してきた。南チロル生まれのテニー、ブラウンシュヴァイク出身のヴィルケとかってオーストリア騎兵隊将校であったレツニツェックが、再三この諧虐的な雑誌の講読者を喜ばせたので、雑誌の編集も3人の共同作業へ大きな価値を置くようになった。グロテスクで、機知に富み、解剖学的と言えるまでの戯画が描かれたものの最たるものは、放浪者や特異タイプを描写することの名手ヴィルケの筆によるものであった。特に有名なのは「死にゆくミュンヘン児」であった。

レツニツェックは熱烈な女性崇拝者で、陽気な気分とエロチックなモチーフを雑誌へもたらし、謝肉祭の女性が彼の大きな主題であった。

だが、フランツ・ヨーゼフ街18番での共同生活の時代は短かった。ヴィルケは1908年11月4日に35歳の若さで死に、レツニツェックは1909年5月11日に41歳で亡くなった。レツニツェックは臨終の床で医師に、死後、自分の心臓を針(それは女友達の帽子ピンのことでであるが) で刺してくれと依頼したのであった。他に代え難い2人の漫画作家の死は、『ジンプリチシムス』にとって大打撃であった。3人のうち最年長のテニーのみがアンマー湖畔の木造家屋で84歳の長寿に達した。

64. オスカル・マリーア・グラーフの享楽の宿 (Hohenzollernstr. 23)

バイエルン州ベルク出身の批評家であるとともに民俗的なリアリズム作家オスカル・マリーア・グラーフ (1894.7－1967.6) は、1911年にボヘミアンとしてミュンヘンへ来たり、1915年に兵役を忌避したあと、バイエルンの革命運動に加担したこともあったが、本格的に1918年から亡命する1933年まで、ミュンヘンのバーラー街37番やホーエンツォレルン街23番ですごす様になった。これらの時代は、特に小説『我らとらわれ人』や『外からの物笑い』に反映している。

ベルリーン、ハンブルク、そしてハンブルクへ移ってから、第1次世界大戦後、バーラー街37番の裏側の建物で行った奔放なアトリエ祭について思い出して語っている。当時、まだ無名作家で軽薄者だったグラーフは、娘たちの胸を包み込む様に、微笑みながらキッスをし、しばしば彼女たちに「どうかエロッチックに、もっとエロッチックに」「どうぞセックスのデモクラシーを」「放蕩

と好色のあらん限りを」などと語りかけたと言う[56]。よく耳にするシュワービングの伝説的なこうした遊びの資金を提供したのは、裕福な商人やルール地方から訪れた経営者たちであった。こうした遊びにグラーフはとても可愛らしいシュワービングの娘たちを誘ったのである。

彼のもとへは遊び目的の娘たちや商用旅行中の企業家ばかりではなく、有名な俳優やカルル・ヴォルフスケール（1869－1948）やオスヴァルト・スペングラー（1880－1936）の様な精神面の知人も訪問した。つまり、彼は祭から次の祭までは身持ちの良い好紳士だったのである。

それに先立つ故郷ベルクの町やシュタールンベルク湖の描写、またアウフキルヘンの牧師館学校での体験は、伝記的な『村の強盗団』（1932）『私の母』（英語版1940）で描かれている。彼はヒトラーを痛烈に侮辱し、出国せざるをえなくなり、亡命地ニュー・ヨークで死亡した。

65. 女流作家レーナ・クリストの旧居（Hohenzollernstr. 30）

靴屋の娘（マグダレーナ・ビヒラー）とセイルスマン（カルル・クリスト）との間の私生児としてレーナ・クリスト(本名レーナ・ベネディクス、1881.10－1920.10）は生まれた。バイエルン州グロンの祖父マティアスの手元で養育され、9歳のとき、ミュンヘン市北部フライジンガー街道脇の旅館兼飲食店「フロリアンの水車小屋」で働く母親のもとへ引き取られた。1881年から1920年にかけて、彼女はこの南都のホーエンツォレルン街30番とヴィルヘルム・デュル街5番で生活し、その間、カッセル出身の作家P.ベネディクスと2回目の結婚をしたり、また意地悪な母親との回想をふくめて『余計な女の思い出』や『マティアス・ビヒラー』といった物語をバイエルン方言を交えて書き綴ったりした。バウワー街40番の家でルートヴィヒ・トーマ（1867－1921）へ宛て遺書を書き、1920年6月30日に自殺をはかった。今日、「フロリアンの水車小屋」が無くなってしまっているため、不幸なこの女流作家を悼み、ザント街45番の旅館「ドイツ樫屋」には、「当店で彼女は1893年から1901年まで『旅館のレーナちゃん』として働いた。墓地は森林墓地に」の記念版が掲げられている。

66. レーニンの隠れ家（Kaiserstr. 46）

シュワービングでひっそりと生活するロシア人は詩人や画家ばかりではなかった。1900年9月から1901年4月まで、どうすればロシア民衆がロシア帝国のくびきから解き放つことが出来るか熟考している男子がいた。その時、30歳になっ

たヴラジミール・イリイッチ・レーニン（1870－1924）である。レーマー街と交差するカイザー街46番は、現在、街角に位置するレストランとなっているが、ここで、「何をするか？」「革命の入門書」が書き始められた場所である。またここでどんな方法や手段でロシア皇帝の威光が失墜し、支配力が弱体化するかについて、昼夜をとわずひとりのロシア人が考えに考えた。

この様に、シュワービングの真ん中で、レーニンはマイヤー（Meier）の偽名を使用して大革命の戦術を編み出し、翌年には全欧のあらゆる革命のためのシグナルを送る準備をした。1900年にシュトゥットガルトからミュンヘンへ移り来ると、早速、扇動新聞『火花』（イスクラ、1900年末レーニンによって創刊された革命的マルクス主義者の全ドイツ的な新聞）の秘密印刷所を見つけた。無論、彼は警察へは届出はしなかった。彼は隠れ家をカイザー街（当時、53番）の裏側の建物の１部屋で暮らす社民党員ゲオルク・リットマイヤーのもとに見つけた。リットマイヤーは居酒屋『オッチャン亭』を経営していた。1901年春にミュンヘンにたどり着いた妻ナデジダ・クループスカヤは夫の貧相な部屋と貧弱な食事について、のちに『レーニンの思い出』の中で言及している。この頃、ここにはレーニンのほかに、マルトフ、ポトレソフ、ザスーリッチが住んでいた。

子供の泣きわめく声がそのまま聞こえる劣悪な環境にある１階の小部屋で、レーニンはテロに頼ることに警告を発し、16年後に成功と名誉をもたらす革命的組織と結び付けられた不満の抗議と闘う意志の総量の戦術的形態を見出した。この２つの結合にたどりつくためには、新聞が不可欠であったのだ。自分の『火花』がその理念を普及さすものにならなければならないし、革命を組織化し、具体化しなければならないと彼は確信した。火花は確実に、ミュンヘンから国境を越え、モスコワやペテルスブルクへと飛んだ。また長く厳しい亡命生活であるのにもかかわらず、ロシアと絶えず密接な連絡をとり、ロシアから始終人がやって来て、情報の面では不便をおぼえなかった。

67. ローダ＝ローダの宿（Kaiserplatz 5.）

レーニンの隠れ家から20メートルほど東へ行くと、聖ウルズラ教会脇でカイザー広場に出会う。この広場５番の建物に1910年から1913年までオーストリアの作家アレクサンダー・ローダ＝ローダ（1872－1945）が居住していた。彼が第１次世界大戦前のシュワービングの原型を形作ったと称されている。彼は自宅で蟄居しているのが好きで、様々の新聞や雑誌に滑稽な物語を執筆した。だ

が、またしばしばビアホールへ駆けつけ、特に喫茶店『ステファニー』がひいきで、友人とチェスをして数時間すごした。彼の愛用の服装は赤のチョッキであった。聖母教会のないミュンヘンが想像できない様に、赤いチョッキなしのローダ＝ローダは考えられない。彼が1910年にカイザー広場の住宅に引っ越して来たとき、すでに彼の文学的な頂点は過ぎており、最も有名な喜劇『将軍丘』(1910) は擱筆済みだった。

67. ファルケンベルクの家 (Viktoriastr. 11.)

カイザー広場から北へ向かってヴィクトリア街が通じている。この11番にオットー・ファルケンベルク (1873－1947) が住んでいた。彼はベルリーンとミュンヘンの大学で学んだあと、ミュンヘンのキャバレー「11人の刑吏」の共同設立者になり、劇評家としても活躍した。また1916年から1944年まで「ミュンヘン小劇場」の総監督として働き、G.ストリンドベルヒ、G.カイザー、P.クラウデル、B.ブレヒト等を上演し、この小劇場をドイツ有数の指導的な劇場へと高めた。1947年にミュンヘンで没し、旧シュタールンベルガー墓地に葬られている。彼の著書『わが生涯、わが劇場』(1944)は一読に値する。

(未完)

1997.4.22

注

(51) Lou Andreas-Salomé: Lebensrückblick. Frankfurt am Main 1951.

(52) Rainer Maria Rilke: Briefe. Wiesbaden 1950.

(53) Katia Mann: Meine ungeschriebenen Memoiren. Hrsg. v. Elisabeth Plessen und Michael Mann. Fischer Taschenbuch Verlag 1976 ; ^{3}1980. S.26.

(54) ibid. S.30.

(55) Inge Scholl: Die weiße Rose. Frankfurt am Main 1952.

(56) Vgl. Oskar Maria Graf: Gelächter von außen. München 1966.